

# 色弱者に優しい環境づくり

NPO 法人北海道カラーユニバーサルデザイン機構（札幌市）

「教壇の先生が『ここは大事なポイントですよ』と、黒板に赤チョークで文字を書きます。せっかくの赤色文字なのですが、いくら目を凝らしても見にくい、見えにくい児童・生徒がいます。色弱なんです。かつては色盲とも呼ばれていましたが、差別感のある言葉なので、いまは色弱と表現しています。色弱者は日本人男性の場合、ざっと20人に1人、女性は500人に1人はいる、とされています。札幌市内で約4万6千人、道内だと約14万2千人になります」

札幌市内の小学校で開かれたPTAの会合に講師として招かれた（NPO法人）北海道カラーユニバーサルデザイン機構スタッフの話に、集まった30人ほどの父母たちの間から「ホー」「ウーン」と、ため息が漏れた。

講師は、さらに言葉を継いだ。「ですから、1学級に何人かの色弱児童・生徒がいるはずなんです。ところが、色弱児童・生徒の多くは『先生、見えにくいんです』とは言わず、じっと我慢しています。同級生に色弱と知られたら、ひょっとしていじめられたりしないか、との不安もあるからです。結果として、いつまで経っても、先生は気づかず、赤チョークを使い続けることになります。いまは色弱者にも判別のつきやすいチョークが開発されています。これです」。

同席した校長先生が、その新開発チョークを使って板書してみた。「このチョークは前から知っていたので、今度からこれを購入するようにします」。



薄野の光景（左）と色弱者の見え方の一例（右）

## ■ 色弱者にも不可欠な配色・

### デザインの提供

(NPO法人)北海道カラーユニバーサルデザイン機構(徳中五郎会長、谷越律夫理事長)は、2006年「社会に対し、色弱の正しい情報提供や適切なアドバイスがされてきたとは言えない。色弱者が的確に理解できる新しい配色、デザインなどの普及をしていこう」と設立された。

メンバーは谷越律夫理事長(印刷会社経営)をはじめ、グラフィック、インテリアなどのデザイナー、医学、情報分野の大学関係者ら約20人。父母ら中心の会員が約100人。

「入社を望んでわが社にやってきた学生が、色弱だからと自らあきらめ、帰っていった姿が目には焼きついて、東京の専門家たちの協力を得て、創立したんです」と谷越律夫理事長は言う。

年間約200万円の活動費は会費だけではとうてい足りず、講演代なども充て、事実上の手弁当の東奔西走が続いている。個人の年会費は3千円(入会費3千円)で、団体の場合は5千円(同5千円)、法人だと2万円(同1万円)。

随時、会員の集いなどを開催している。時には動物園に出かけたり、楽しみながらの施設見学などしている。

## ■ がまんするには及ばない

色弱者は赤色が沈んで目立って見えにくいばかりではない。「色が青いね」という感じが、よく分からない。青・紺系の色と紫が区別しにくいなど、大別して四つのタイプがある。いずれも遺伝による、いわば「個性」であり、対応策もかなり確立している。

色と色の境目に細い黒や白い線を入れたり、白い縁取りをしたり、形の違いを利用する一など、多種多様な工夫が編み出されている。従来の赤チョークに代わるチョークをはじめ、新製品の開発も進んでいる。色弱だからとがまんしたり、あきらめるには及ばないのである。

活動の柱は、まず「カラーユニバーサルデザインの普及、啓発」。カラーユニバーサルデザインというのは、色弱者を含むすべての住民にとって「分かりやすい配色・デザイン」。具体的には、公共施設や展示施設などの案内掲示や路線図、時刻表など日常生活に不可欠な配色、デザインを提供する。

学校現場や行政、企業などの要請に応じて、講師を派遣したり、製品や施設の配色・デザインなどについてアドバイスをしている。また、新製品開発、施設づくりにも設計段階から参加している。



色弱についてのセミナーに集まった人たち。関心度は高まっている

## ■ 進む行政対応

札幌市が2008年、地下鉄表示の一部を改善している。

南北線のドアの位置を表示するパネルで「緑（青）の看板の前に3列に並んでお待ちください」とアナウンスされる。その緑色がやや暗めで色弱の人には「明らかに緑」とは判別しにくい色だった。そこで看板の右上に「緑」、あるいは「青」の漢字を追加した

道の広報誌「ほっかいどう」、新千歳空港の案内表示、旭山動物園の案内看板、北海道ガスの「ガス安全使用の手引き」、じょうてつの「バス路線図」などが、色弱者にわかりやすく改善されている。

行政が積極的なのは、法制度の整備が進みつつあるから。厚生労働省は2001年「労働安全衛生法」の規則を改正して、雇用の際の健康診断項目「色覚検査」の義務づけを廃止した。

文部省も2003年「色覚に関する指導の資料」を小中学校現場に配布して「白と黄のチョークを主体に」、テストの採点も「細字の赤ペン・ボールペンは避ける」などの指導をしている。「バリアフリー新法」も、2006年施された。

また、道の「北海道福祉のまちづくり条例」（2003年改正）も「公共的施設における障がい者、高齢者等が円滑に利用できるようにするための措置」を掲げた。

## ■ 認証（CUD）マークの発行

企業などからの依頼物を検証して、色弱者対応が十分であると認めると、認証（CUD）マークを発行している。希望があれば認定証も発行する。

このマークを取得して製品自体や販促資料に添付することで「ヒトにやさしい社会づくり」に貢献している姿勢を明らかにできる。対応できていない競合製品・施設に対して差別化を図り、色弱者対策をいっそう進めよう、という狙いだ。

CUDマーク認証を受けた先駆的な試みとして、置戸町の「観光パンフレット（外国人観光客用）」、旭山動物園案内看板、じょうてつバス「路線図」などがある。色弱者者に対する理解が、民間でも徐々に浸透してきた。

一連の活動が認められ、北海道カラーユニバーサルデザイン機構は、道から平成19年度北海道福祉のまちづくりコンクール（ソフ

ト部門)の最優秀賞を受賞している。

道外からも注目されるようになった。最近では山梨県議会の議員らが、この同機構を訪ねてきた。議員らは2時間にわたって話を聞き、初めて見る色弱者用のチョークを手にして「わが県でも絶対に必要な活動だ。頑張っ

て!」と感想を述べていた。

こうして、色弱者対策は確実に前進しているが、教育現場ばかりでなく、行政、企業の現場まで十分、浸透しているわけではない。

「色だけの問題ではありません。お互いの個性を認め合い、困った時には声をかけ、助け合う精神を培うことこそ、先決なんです」。

谷越理事長らの目は「もっと、もっと色弱者に優しい社会環境づくり」に向けられている。



認証 (CUD) マーク

■ 連絡先

〒007-0810 札幌市東区東苗穂 10 条 3 丁目 18 - 1  
NPO 法人北海道カラーユニバーサルデザイン機構  
TEL : 011-791-9450 / FAX : 011-791-9455  
Email : info@color.or.jp  
URL : <http://www.color.or.jp/>